じさまとばさまとえだけど。じさま山さしば刈りに行ったし、ばさままだ川さ洗濯に行ったど。したば、箱が流れてきたけど。その箱拾ってみだば、箱にうりの種こがはってらっけど。うりの種こ、戸棚にひでだば、赤子の泣き声がするど。

「なんだか戸棚のなかで、赤子の泣き声するな」

って、あげてみたば、きれいだ女の子どもが生まれてだけど。うりひめこと名前つけだと。それでしゃ、じさまとばさまど、まんまだとか、赤いトドなど食わせで、育でだっけど。育てで、だんだんにおがって、ハダ織りさせていたば、じさまとばさまと町に行ってくるがら、あまのじゃく来ても、戸をなんぼしてもあげるなよって、言っていったけど。したば、じさまもばさまも来ぬうちに、

「うりひめこ、うりひめこ、遊びに行ごう」

って、あまのじゃく来たけど。

「びゃっこ、戸あげてけれ」

って言うど。

「じっさとばっぱにおごられるから、戸はあげれね」

ったば、

「爪はいるだけ、びゃっこあげてけれ」

どて言っても、

「んだばっこ、七ひろ」

って、ハダ織りしてだど。そしてだば、あまのじゃくうるさく言うので、うりひめこ、爪のあいだだけあげてけだど。爪が長いために、戸あけてあまのじゃくはいってきたど。

そしてこんだ。

「長者野のモモ、たいしたんめぐ、いっぱい成ってだから、もぐに行ごう」

って言うど。

「んだって、ハタ織りやめで行けば、おごられるから、行かねエ。

って言ったど。んだたて、行ぐとてきがねもんだから、

「はき物がねエ」

って言ったば、

「ここにぞうりこある。これはいで行ごう」

って言ったど。

「そのぞうりこはげばな、パタパタとなって、ばっぱさ聞ければおごられるし」

って言ったば、

「この下駄こはいで行ごう」

と言うど。

「下駄こはげば、カラカラとなっておごられる」

って言ったど。

「したば、俺、背中さぼってえぐ」

って言うと。

「お前の背中さトゲ生えでるから、やんだ」

と言ったば、

「したば、ここさ板こあてるがら、ぼってえぐ」

って、ぼわれで行ったど。長者野さ行ったば、モモすっかり赤くなって、成ってだんだとよ。

と、あまのじゃくあがったど。そしてしゃ、んめえのだけもいで、ガリッとかじって、目くそと鼻くそつけで、

「そりゃ」

って、うるしめんこどこさ、なげてよこすもんでおの。したたて、きたなくてくわれねべ。なんぼもそうするもんだから、

「こんだ、俺あがってもくたえに、お前おりでこい」

と言ったんだと。

「んだら、お前もげ」

どて、うりひめこどこ、モモの木さあげだんだど。

「そのてっぺんにいいモモある。それもいでよさせ」

どて、あまのじゃく、下で言うんだど。

「これがア」

って言えば、

「その上のよ」

って言うんだと。

「これがあ」

って言えば、

「その上のな」

と言うもんだから、うりひめこ、木のうらさあがってしまったんだと。そのとき、下にえで、ゆすゆすと柿の木ゆすぶったんだと。したば、うりひめこぼたんと落ちで、死んでしまったわけだ。あまのじゃくこんだ、うりひめこの顔の皮かぶって、うりひめこの家さ来て、ハタ織ってじさまとばっぱと来るの待ってえだど。

「デンデン」

ど、ハタ織る音するど。帰ってきたじさまとばさまは、

「なんだか、ハタ織りの音がべつだな。うりひめこ、うりひめこ、いま来たどこぞア」

「ほう、いま来たがあ」

って、あまのじゃく、うりひめこになって、戸あげてけだど。町からやきモチ買ってきたば、どっく、どっくと、二つも三つも食うわげだ。

「なんだけな。そんなにかねたてえがべったあ。つらから口からきたねごど」

ど、つらあらってけだど。ごしごしこしったば、皮からっとたくれで、あまのじゃくであったと。

「こりゃ、あまのじゃくだ」

って、ばっぱ、あまのじゃくどこみんじゃさぶつけて、殺したど。